説経の諺使用 ―「刈萱」を中心に―

柏原　卓

一．はじめに

本稿では高野山を舞台にした説経「刈萱」を中心に、下層民の芸能である説経において、諺や慣用句がどのような機能を果たしていたのかを考察する。そもそも諺と慣用句の定義は色々になされて来たが、本稿では深入りを避けて考察に必要な範囲で参照するに留める。

説経「刈萱」は、信濃善光寺の親子地蔵が前世は人間だったと説く本地語りの音曲である。あらすじは次の通りである。加藤左衛門重氏は九州六か国の領主であったが無常を悟って出家し法然上人の黒谷を経て高野山に籠り刈萱道心と名乗る。出家の折に胎児であった石堂丸が十三歳となり母と共に父を訪ねて黒谷から高野山に至る。女人禁制のため石堂丸一人が母を麓の宿に置いて高野山中を多くの聖に事情を説明しつつ探し回る。たまたま出会った父刈萱道心は、話を聞いて息子石堂丸と悟るが、修行の誓いを貫くため名乗りたい気持ちを抑え、自分は相弟子だが彼は病死したと偽る。傷心の石堂丸が宿に戻ると母は亡くなっていた。石堂丸は相弟子(実は刈萱)を頼って母の野辺の送りをする。この時も刈萱は名乗らない。石堂丸が母の遺骨を届けに戻った九州では姉も亡くなっていた。

ふたたび高野山に帰った石堂丸は刈萱の勧めで出家して道念となり、刈萱と共に修行に励む。周囲に実の親子と知られることを恐れた刈萱は北国修行に出かける。その後、刈萱と道念は同日に亡くなり双方から紫雲がたなびいて絡みあったのは、あの世で親子と名乗り会えた証拠である。三世の諸仏が二人の行いに感じて善光寺の奥の御堂に親子地蔵としてまつり、後の人に崇敬された。以上があらすじである。

「刈萱」など説経の研究において諺や慣用句を取り上げる意義は何か。諺や慣用句は「その形式と意味が慣用されて広く知られている」「多言を労せずとも短い形式で印象的に端的に伝えられる」という共通性がある。こうした機能を持つ諺や慣用句を下層民の芸能である説経でどのように活用しているのかは、説経の表現総体を考察する上で検討の価値ある問題だが、これまで注釈書でいくつかの諺や慣用句を指摘し意味説明をする程度にとどまっており、十分とは言えない。

考察を一歩進める手順として、①他の説経「小栗」「信徳丸」「山椒太夫」の注釈書には諺である旨を指摘した注が一定数あるのに「刈萱」には二箇所しかない、②その原因を検討して注がされた以外に諺があることを解明し、③諺や慣用句の使用状況と表現機能の考察に進むことにする。調査する作品は、古態の五説経に含まれる「刈萱」と「小栗」「信徳丸」「山椒大夫」である。[1]

資料とする本文は、活字本注釈書3種の『説経節』(平凡社東洋文庫)、『説経集』(新潮日本古典集成)、『古浄瑠璃・説経集』(岩波新日本古典文学大系)に依る。これらの底本に欠丁・破損とか場面の取捨があるために、やむなく異本を参照せざるを得ず、取り合わせ本文になっている場合もある。詳しくは各注釈書の解説を参照のこと。

二．研究動向と方法

芸能史・文学史においては、説経と言う芸能の発生と発展から衰退に関する芸能史研究、正本や絵巻などテキストの収集翻刻、文学性の議論、注釈書刊行等の業績が重ねられて来た[2]。今回取り上げる「刈萱」の主舞台高野山と説経の関係性については、高野山内の時宗聖が注目されている[3]。

言語に関わる先行研究には主として、①説経の難しい語句やさまざまな慣用的表現についての研究、②諺と慣用句一般に関する収集と理論研究がある。後者②を見ると、まず資料収集では『古事記』等における事例の指摘に始まって近現代の諺辞典・慣用句辞典に至る大量の蓄積があり、理論研究[4]では定義や分類の精密化が進み、さらには辞書的記述を超えて実際文脈での使用状況の研究が提唱されるようになった[5]。

本稿筆者のこれまでの関係研究としては、柏原(二〇〇四)で説経らしい語り口を構成する慣用句や語法を分類考察したのに続き、甲南大学総合研究所二〇一九～二〇年度研究チーム課題「東アジア社会における諺と慣用句の研究」の分担で、説経「山椒大夫」とパンソリ「春香伝」の諺使用を研究した。成果を柏原(二〇二〇)に掲載したのに続き、二〇二一年二月に分担研究報告書の論文を提出した(柏原二〇二二)。

こうした研究動向と経緯を踏まえ、説経における諺と慣用句の表現機能を詳しく考察することを本稿の目的とする。

研究方法は、注釈書3種で「諺」「慣用句」等と注記してある句を検討した後、さらに収集範囲を広げて諺・慣用句と言える語句の考察に進んで、場面文脈の中での意味と表現効果ないし表現機能を具体的に考察し記述する。

資料とする本文は、前章の末尾に既述の活字本注釈書3種による。

三・一．古態の説経の注釈書における諺注記と作品中の諺

古態の説経「刈萱」「小栗」「信徳丸」「山椒大夫」を三種の注釈書で見たとき、諺と明記して意味用法を説明した注の量が、次の（表一）（表二）のように「刈萱」のみ特に少ない。表中の略称「平凡」「新潮」「岩波」はそれぞれ『説経節』（平凡社東洋文庫）、『説経集』（新潮日本古典集成）、『古浄瑠璃・説経集』（岩波新日本古典文学大系）を指す。ちなみに「刈萱」で諺注記が少ない原因は、作品の分量に比例しているためとは考えられない。たとえば「新潮」の挿絵を除いた大体の頁数で示すと、「刈萱」六〇頁、「小栗」八三頁、「信徳丸」四七頁、「山椒大夫」六八頁であって、「刈萱」六〇頁は中間くらいである。

（表一）古態の説経の注釈書における諺注記の数

【刈萱】	平凡	○	新潮	二	岩波 一
【小栗】	平凡	六（一）	新潮	一一	岩波 一一（一）
【信徳】	平凡	三	新潮	七	岩波 不採用
【山椒】	平凡	九（一）	新潮	一五	岩波 一一（六）

※「平凡」「岩波」の丸カッコ数字は、諺と明記した注ではないが、類義の「譬え」として注したものの内数である。

（表二）古態の説経の注釈書における諺注記の内訳

表中の×印は「諺注記が無い」意を、―印は「異本関係による欠文（刈萱、山椒）、または作品不掲載（信徳）」の意を表す。

「平凡頁」「岩波頁」の丸カッコ数字は、諺と明記した注ではないが、本文や注で類義の「譬え」とした上で意味を注したものの所在頁数である。

作品	番	諺注記された句	平凡 頁	新潮 頁	岩波 頁
刈萱	一	雨の降らぬを吉日（思い立ったが吉日）	×	一六	―
刈萱	二	身捨つる藪は無けれども子捨つる藪は有る	×	四六	二八三
小栗	一	好事門を出でず悪事千里を走る	二〇四	二一五	一六七
小栗	二	錐は袋を通す	二〇五	二一五	一六七
小栗	三	百様を知りたりとも一様を知らずは知って知らざれ	×	二二三	一七五
小栗	四	夫の心と内裏の柱は大きても太かれ（と申す譬）	（二一〇）	二二五	一七六
小栗	五	鴨は寒じて水に入る、鶏寒うて木へ上る	二一三	二三一	一八二
小栗	六	愚人夏の虫飛んで火に入る	二一六	二三五	一八五
小栗	七	笛に寄る秋の鹿は妻故にさてその身を果たす	×	二三五	×
小栗	八	人は運命尽きぬうとて知恵の鏡も曇り才覚の花も散り失せて	二二一	×	（一九四譬）
小栗	九	七尋の島に八尋の舟を繋ぐ	二三一	二六〇	二〇九
小栗	一〇	烏の頭が白くなつて駒に角が生ゆるとも	×	二七七	二二四
小栗	一一	旅は心世は情	×	二七七	二二四
小栗	一二	廻船は浦がかり	×	×	二二四
小栗	一三	女人と申するは氏なふて玉の輿に乗る	×	×	二四二
信徳	一	雉夫婦の者にて物の哀れをとどめたり（焼野の雉）	×	一五八	―
信徳	二	思ひ内にあれば色外に現るる	×	一六九	―
信徳	三	百様知って一様知らずば争うことなかれ	一二八	一七二	―
信徳	四	夫の心は（と）大仏の柱は大きても太かれ	一三〇	一七四	―

信徳	五	女人は胸に知恵あり、心に知恵ない	×	一七四	—
信徳	六	虎の尾を踏む	×	一七五	—
信徳	七	毒蛇の口を逃れる	×	一七五	—
信徳	八	人の頼むに頼まれよ(り)	一四六	×	—
山椒	一	光陰は矢の如し	—	—	三一八
山椒	二	旅は心、世は情	五	八六	三二四
山椒	三	大船は浦がかり	五	八六	(三二四)
山椒	四	捨て子は村の育み(新潮は前項に続ける)	五	八六	(三二四)
山椒	五	木があれば鳥が住む、港があれば舟も寄る	×	八六	×
山椒	六	ひと通り一時雨一村雨の雨宿りこれも他生の縁	五	八六	×
山椒	七	善は弱く悪は強い(↑善に従うは登るが如く、悪に従うは崩るるが如し)	—	—	三二七
山椒	八	朝恵比須(↑朝恵比須に夕大黒)	八	×	(三二〇)
山椒	九	賢臣二君に仕えずてん(貞)女両夫に見えず	九	九四	(三二一)
山椒	一〇	二張の弓を引く	×	九四	(三二一)
山椒	一一	重荷に小付け	一二	九九	三三六
山椒	一二	岩に耳、壁のもの言う世時(ごとき)	一五	一〇六	三四三
山椒	一三	夫の面の傷は買うても持つ	×	一〇九	三四六
山椒	一四	一度には懲りをする、二度に死にをする	二一	一一四	三五〇
山椒	一五	浮き木の亀(たとえ)	(三二)	一三一	(三六六)
山椒	一六	侍と黄金は朽ちて朽ちせぬ	×	一四一	三七五
山椒	一七	苦い蔓には苦い実が成る、甘い蔓には甘い実が成る	×	一四六	三八〇
山椒	一八	盲の打つ杖には咎もなし	×	一四九	三八二
山椒	一九	嬉しきにも悲しきにも先立つ物は涙也	×	×	三八四

(表一)(表二)に見られる通り、「刈萱」においては諺注記が「新潮」二例とその一つと同じ「岩波」一例のみで、他の作品に比べて目立って少ない。

その原因として、諺は場面に応じて必要なものを使用するため、作品ごとに場面が異なるに伴って諺の出現も異

なるのではないか(後述「三・四・四」で言及)とか、語った太夫ごとの差だろうか等といちおう考えてみることが出来るが、確かなことは言えない。

むしろそれ以前に(表一)(表二)は「諺注記の表」であって、実際に作品中にある「諺の表」ではないことが大切である。じつは、諺注記が無くても諺らしさを備えた諺や「諺様表現(諺らしい成句)」は説経の詞章にかなり存在している。本稿では「刈萱」にしぼってそれらを収集して、後掲する(表三)にて実態を一覧できるようにした上で(三・三に掲載)、それらの機能を考察する。

三・二　諺と慣用句を合わせて対象に

定型表現として諺に隣接するものに慣用句がある。慣用句と諺には基本的な区別はあるが(次の段落で詳述)、両方に使われる場合もある等、境界が曖昧である。また説経において諺と慣用句という定型表現は「広く知られた短い表現で、簡潔に印象的に伝える」という共通の機能を担っているように見える。そして注記が無くても慣用句と判断できる表現が作品中にかなり存在する点は、前述の諺の場合と同じである。本稿では今回「刈萱」にしぼってそれらを収集して後掲(表四)に示した上で、諺の(表三)と合わせて機能を考察しようとする。

ここで諺と慣用句の一応の基本的な区別をしておこう。『日本国語大辞典』の説明では、諺は「昔から世間に広く言いならわされてきたことばで、教訓や風刺などを含んだ短句。諺語(げんご)」、慣用句は「二つ以上の単語が必ず同じような結びつきをするもの、また結合して全体が特定の意味を表す言いまわしなど。慣用語。イディオム」となっている。

この内、慣用句の「合成変化」は重要である。「手に汗を握る」等は語の連続によって合成変化が起きて特定の意味になり、元の単語のみからは全体の意味が分からない。それに対して諺(例えば「犬も歩けば棒に当たる」)は語の

元の意味が組み合わさった文で「合成変化」は起きていない。ただし比喩によって真意が分かり難くなっているのである。

また慣用句は語相当で文法上の変化ができ「手に汗を握って／握った／握る（連体形）／握らせる」等となり得る。いっぽう諺は固定した文相当で変化せず「犬も歩けば棒に当って／当たった」等は普通ではない。

意味面で、諺は物事の一面を切り取って示す文である。それが特定場面で教訓・風刺などの機能を果たす。慣用句は「物事の一面を切り取る」ものではなく、譬喩やリズムで表現を印象深くするのを主眼とする。

ここで、本稿において収集して以下に示す慣用句の範囲が上記説明と少し異なる点があることをとり急ぎ示して、あらかじめ読者の了解をいただきたい。たとえば「新潮」で「頃はいつなるらん」に「慣用句」と注する。この句は単語の意味を組み合わせて理解でき、意味の合成変化は起きていない。思うに「新潮」の「慣用句」という用語は、他の例からも「説経に繰り返し出現する定型表現」の意と思われる。繰り返し出現することで説経らしさを演出することに着目して注したと解される。「岩波」では「常套表現」「類型表現」と注する類である。本稿も説経らしい表現に注目してこれら注記を参照しつつ収集した。この手の定型表現は、宮地裕（一九八二）の「連語成句的慣用句」すなわち「一般の（自由な：柏原注）連語句より結合度が高いだけのもの」に当たる。

三・三．「刈萱」の諺と慣用句の実態

ここからいよいよ「刈萱」の諺と慣用句の収集結果を示した上で、説経における機能を考察していくこととする。収集結果を（表三）諺様表現、次に（表四）慣用句で示す。

その前にまず前提となる事情から記しておく。注釈書の内で「平凡」（平凡社東洋文庫『説経節』）と「新潮」（新潮日本古典集成『説経集』）はどちらも底本が「寛永八年卯月刊　しやうるりや喜衛門版」である。いっぽう「岩波」

（岩波　新日本古典文学大系『古浄瑠璃　説経集』）は底本が「横山重旧蔵大型絵入古写本」である。底本しやうるりや板本と絵入古写本では詞章がかなり異なる。この事情に鑑みて、表作成に当たっては「平凡」「新潮」の実態を「新潮」によって代表させ、「岩波」を別途に示した。

ただし、「岩波」の二八一頁末五行目から二九〇頁三行目は、底本の絵入古写本に無い「高野の巻」という弘法大師関係の話を「平凡」「新潮」の底本しやうるりや板本で補っている。したがって「岩波」のこの部分は「平凡」「新潮」と同内容になるので表に入れず省略した。

表の各用例は「用例（本の略称・頁）」の書式で示した。本の略称の「新」は前記「新潮」を、「岩」は前記「岩波」を指す。

【例】（表三）（一）①老少不定（新・一二に二例）老いた若いに定めはない（岩・三一一）

これは次のことを表す。「老少不定」の用例が新潮の一二頁に二例存し、類似の「老いた若いに定めはない」の用例が岩波の三一一頁に存する。このように丸カッコ内は注釈書と用例所在の頁を記す。

（表三）「刈萱」の諺様表現

（一）新潮・岩波に共通ないし類似

①老少不定（新・一二に二例）／老いた若いに定めはない（岩・三一一）

②なにがしの遁世は我が知行を勝る武士に奪ひ取られ身の置き方のない時にこそ遁世修行（新・一三）／弓取の遁世は人に世領を奪ひ取られ身の置き方のなき折に遁世修行（岩・二五一・二五二・二五三）

③禁野の雉は子を思ふ（新・四二）／禁野の雉は子を惜しむ（岩・二七九）

④旅で一夜の宿借るは親とも子とも頼む（新・四三）／旅で宿取るは親とも子ともお主とも頼み頼うで宿取る

（岩・二八一・三一〇）

⑤知らねばこその問言（新・五七、岩・二九一）

⑥この世に立てた卒塔婆は同じ台座に直ったるが如くなり（新・六四）／この山で立てたる卒塔婆と申すは同じ台座に直りたるが如くなり（岩・二九九）

⑦衣の上の結縁（新・七〇、岩三〇五）

⑧悪事千里を走る（新・七三、岩・三〇九）

（二）新潮のみ

①蛇身と書いて女と読む（新・一五）

②理非の分らぬ女と問答は夫の僻案（新・一五）

③雨の降らぬを吉日（新・一六）

④出家出家によらず俗俗によらず（新・二一）

⑤山と言ふ山に霞のかからぬ山もなし（新・四四）

⑥夜泣きする子は七浦七里枯るる（新・四四）

⑦身捨つる藪は無けれども子捨つる藪はある（新・四六）

⑧一字をお授けあれば十字をお悟りある（新・四八）

⑨あと白川（新・五〇　↑　諺「あと白波」の変形）

⑩漆黒いと申せども万の家具をのぶるなり（新・五一）

⑪三つの炎（新・七二）

（三）岩波のみ

①煩悩の綱を切り菩提の綱に取りつきて(岩・二五三)
②後生を大事に願うてこそ仏にはなるべき(岩・二五三)
③人の心は一葉二葉で知る(岩・二六六)
④傘一本で立ち出で(岩・二六八)
⑤胎内に子を持って空しく御なり候へば阿鼻無間の業に沈む(岩・二七一)
⑥暮るるを宿、明くるを旅(岩・二七六)
⑦弘法も木の股、萱の中よりお出でなし(岩・二八一)
⑧節(せつ)は時にこそはよる(岩・三〇五)

【内訳】新潮・岩波共通　八種、新潮のみ　十一種、岩波のみ　八種、計　二十七種

(表四)「刈萱」の慣用句

(一)新潮・岩波共通ないし類似

①ただ今、説きたて広め申し候本地は(新・一一)／只今語り申し候物語(岩・二五〇)
②ころはいつなるらん(新・一一)／頃はいつなるらんに(岩・二五〇)
③身の置き方(新・一三)、身のたたずみ(新・一三)／身の置き方(岩・二五一)
④後生の種(新・一三、岩・二五一)
⑤間の障子をさらりと開け(新・一四・三五)／間の障子をさらと開け(岩・二六九)
⑥今申さうか申すまいかとは思へども(新・一四)／今申さうかよ又は申すまいかよ(岩・二五三)
⑦身二つになる(新・一五・三一、岩・二五四・二七一)

⑧月に一度のあかなれし衣をもすすぎ上げて(新・一五)／月に一度づつの垢慣れし衣をも濯いで(岩・二五四)
⑨ともかくも(新・一六、岩・二五五)
⑩お腰の物(新・一六)／お腰物(岩・二五五)
⑪玉の屋形(新・一六)／花の屋形(岩・二五六)
⑫をはや過ぎて(新・一七に四例・二九に三例・三八)／はや過ぎて(岩・二五六に二例)
⑬鰐口ちゃうどうち慣らし(新・一八)／鰐口てうど打ち渡り(岩・二五六)
⑭楽の上に福、福の上の徳を申すにこそ、真にかうきは被るべき(新・一八)／福とも知恵とも願はばこそ、神慮も憎ませ給ふべし(岩・二五七)
⑮髪を剃つて(新・一九・二〇・二二)／髪を剃り申(岩・二五八)
⑯後生まつ最中(新・二〇)／仏法の真っ最中(岩・二五八)
⑰阿鼻無間に落つる(新・二二)／阿鼻無間の業ゑ沈む(岩・二六〇)
⑱身の毛もよだつばかり(新・二六、岩・二六四)
⑲(髪をば)四方浄土と剃りこぼす(新・二五・七一・七五)／髪をば四方浄土へ剃りこぼし(岩・二六五・三〇六・三一一)
⑳きのふけふとは思へども(おぼせども)(新・二八・三二に二例)／昨日今日とは申せども(岩・二六五)
㉑殊に哀れをとどめたは(新・三〇)／物の哀れをとどめたは(岩・二六九)
㉒旅装束の跡ばかり(新・三〇・三五、岩・二六九)
㉓流涕焦がれ(て)(新・三〇・六一・六二に二例、岩・二九七)
㉔落つる(こぼるる)涙の暇よりも(新・三一・六二に二例)／零るる涙の隙よりも(岩・二九八)

㉕御産の紐をお解きある(新・三二、岩・二七二)
㉖父といふ字(新・三四、岩・二七三)
㉗風の便り(新・三四・三九・六〇、岩・二七四・二七八・二九五)
㉘親子(親と子)の機縁(新・三五・三六・五九)／親と子の機縁(岩・二七四・二七五・二九二・二九三)
㉙門出良うて物良うて(新・三八・五六、岩・二七六)
㉚いとま申してさらば(新・四〇、岩・二五八)
㉛五更に天も開くれば(新・五八・六六、岩・二九〇・二九二・三〇一)
㉜曲もなき(新・六三)／曲もない(岩・二九八)
㉝影を隠いて給はれの(隠して給はれなう)(新・六六・六九・七〇、岩・三〇一・三〇三・三〇五)
㉞その恋風や積りけん(新・六六・七三、岩・三〇一・三一〇)
㉟北枕に西向いて(新・六八、岩・三〇五)／西向きに北枕(岩・三〇二)
㊱これは夢かや現かや(現かの)(新・六一・六八、岩・二九六・三〇二)
㊲好しみ悪しみ(新・七一、岩・三〇六)
㊳三つの炎と火葬する(新・七二、岩・三〇七)
㊴お乳や乳母(新・七三、岩・三〇九)
㊵紫雲の雲(が)立つ(新・七六に五例、岩・三一一に二例)

(二)新潮のみ

①大筒大瓶をかきすゑて(新・一一)
②「いかに…に申すべし」(新・一二)

③後生菩提（新・一五）
④芝の庵を結ぶ（新・一五）
⑤同じ蓮の縁（新・一六）
⑥時もいるまい、日もいるまい（新・一六）
⑦先をいづくとお問ひある（新・一八に二例・二九）
⑧元結切り（新・一九）
⑨仮名に物御意ござあれ（新・一九）
⑩とてものことに（新・二〇に二例）
⑪動詞＋にこそ（新・二一に二例）
⑫万死をかけて（新・二一）
⑬大誓文を立つ（新・二三に二例・二五）
⑭垢離を取る（新・二三）
⑮欲垢煩悩の垢をすすぐ（新・二六）
⑯夕べは星を頂き朝には露を払ひ（新・二七）
⑰とにもかくにも（新・二八）
⑱名乗りかくる（新・二九）
⑲先をいづくとお急ぎある（新・二九・三八）
⑳これはさて置き（新・三〇）
㉑当たる十月と申すには（新・三二）

㉒宵に生えたるたかんなが夜中の露にはごくまれ尺を伸ぶるが如くなり(新・三二)
㉓つくりやう道心(新・五七)
㉔無限の業(新・六四・七五)
㉕諸事の哀れ(新・六九)
㉖頼む島もあらざれば(新・六九)
㉗待てしばし我が心(新・七四)
㉘笈取つて肩に掛け(新・七四)

(三)岩波のみ

①元結切つて西へ投げ(岩・二五一)
②幾瀬の事(岩・二五四)
③都は洛中洛外とて(岩・二五九)
④宵には髪を剃り、明くれば大俗人となる(岩・二六〇)
⑤浮世には神や仏は御座ないか(岩・二六一)
⑥夢ほど(岩・二七〇)
⑦げにそよまことに忘れたり(岩・二七二・二七六・二九九)
⑧時の口論、騎馬、笠咎め(岩・二七三)
⑨口説事こそ哀れ也(岩・二七五)
⑩会ふまい見まい語るまい(岩・二七八)
⑪さのみ嘆いそ…連れて心の乱るるに(岩・二七九)

⑫いかなる野の末山の果て(岩・二七九)
⑬朝の露とぞおなりある(岩・三〇一)
⑭行かで叶わん道(岩・三〇三)
⑮頼みても儚き(岩・三一〇)
⑯手に掛かる(岩・三一一)
⑰二十五の菩薩たち弘誓の船に棹を差す(岩・三一二)
⑱後生大事の輩(岩・三一二)

【内訳】新潮・岩波共通　四十種、新潮のみ　二十八種、岩波のみ　十八種、計　八十六種

三・四　考　察

(表三)(表四)の実態に基づいて以下に、「諺・慣用句の種類と量」がかなり多いこと、「底本による違い」として諺・慣用句の有無や形態の違い、「説経らしい語り口の要素」になっている点を述べていく。

三・四・一　諺・慣用句の種類と量

表のように諺は二十七種、慣用句は八十六種が存在していた。その中で繰り返し出現するものもある。繰り返し出現は説経らしい印象を与える。例えば、諺に「弓取の遁世は人に世領を奪ひ取られ身の置き方のなき折に遁世修行(細かい表記や語句の差を無視。以下同じ)」(岩・二五一・二五二・二五三)、「旅で宿取るは親とも子ともお主とも頼み頼うで宿取る」(岩・二八一・三一〇)のような繰返し出現の例がある。慣用句には「はや過ぎて」(新・一七に四例・二九に三例・三八、岩・二五六に二例)、「四方浄土と剃りこぼす」(新・二五・七一・七五、岩・二六五・

三〇六・三一一)、「流涕焦がれ」(新・三〇・六一・六二に二例、岩・二九七)、「その恋風や積りけん」(新・六六・七三、岩・三〇一・三一〇)のような多数の繰返し出現の例がある。これらを合わせるとかなりの量になることを感覚的に大まかに言うと、注釈本に傍線で示しておいて適当に頁を開けばどれかが見当たらない箇所がほぼ無いほどである。

三・四・二. 底本による有無と形態の違い

まず二つの表の「(一)新潮・岩波に共通」の項では、類同の諺や慣用句の間で底本による形態の違いが見られる。異本だから違って当然ではあるが、語りの場での多様性が感じられて面白い。語り手の好みや上演現場の事情などで柔軟に変化したことが分かる。

そして「(二)新潮のみ」「(三)岩波のみ」の項では、一方の底本にしかない用例が知られる。底本によってそれぞれの諺や慣用句の有り無し自体が違っているのである。これは諺や慣用句に限らず詞章のすべての要素も同様であるが、異本故の違いの最たるもので、前述した語りの場の多様性を形態差以上に実感させる事実である。

また、有無と言えば次のような例もある。「諺様表現」の「新潮・岩波共通」の④「旅で一夜の宿取るは云々」は、もう一か所「新潮」に無い場面で「岩波」のみが再利用する。姉の死を知っての台詞「さても姉御一人をば、親とも子ともお主とも頼み頼うで宿取るに、頼みても儚きは」(岩・三一〇)の中の「宿取るに」は、「頼んだ」の連想で決まり文句を使いまわした際に消し忘れたのである。このように決まり文句・慣用句を使いまわす内に他本には無い個所に現れて底本間の有無が生じた例である。

三・四・三　説経らしい語り口の要素

説経らしい語り口と言っても色々な面がある。単純に「説経によく出てくる文句」と理解すれば、諺「知らねばこその問い言」、慣用句「あらいたわしや」「流涕焦がれ」「門出良うて物良うて」他の例を上げることが出来る。

しかしここでは表現力の面を取り上げてみる。説経の始まりは「本地語り」で、人が現世で極度の苦難や悲しみを経てから死後に神仏になる話であり、現世での悲しい物語を悲哀の曲調で語って人気があった。そうした苦難や悲しみを、迫力ある表現や印象深い言い回しで語るのが「説経らしい語り口」の一面である。以下に迫力ある表現や印象深い言い回しを幾つか取り上げて考察していく。

二つの表の中で、「諺様表現」の「新潮・岩波共通」では、④「旅で一夜の宿借るは親とも子とも(お主とも)頼む」には旅行をする際に宿をとる苦労、とりわけ信頼できる宿の主人を選ぶことの大切さが偲ばれ、具体性がある。⑤「知らねばこその問言」には、旅ゆく者が冷たくあしらわれたり無知を笑われることへの恨みが感じられ、旅の切実な実感と言える。「新潮のみ」では⑥「夜泣きする子は七浦七里枯るる」⑦「身捨つる藪は無けれども子捨つる藪はある」は、子捨てが横行した世相をうかがわせ、捨てる親の複雑な心境も感じられる。「岩波のみ」の④「傘一本で立ち出でる(本来は破戒僧が寺を追われる風情)」は、着の身着のままの孤独な心細さが伝わる。⑦「弘法も木の股、萱の中よりお出でなし」の例は御台が高野山の女人禁制に怒って「開祖弘法も女性から生まれたはず」と抗う場面である。彼女はさらに「この山の弘法と七日七夜問答(動詞「もんだう」)とも、問題(連用形名詞「もんだい」)には負けまいの(弘法と七日七夜議論しても負けません)」と意気込んでいる。また⑧「節は時にこそよる」は、刈萱道心が師匠への挨拶を口実に麓の宿で死んだ御台を訪ねるのをためらうので石堂丸が言うセリフ。「礼節は時による」の意であろう。石堂丸の切迫した心情が良く出ている。「岩波」の脚注「『節』は、時節。寛永板『いとま乞ふは時による』」とあるが「時節は時による」と解することになり無理がある。

慣用句は文の一部になることが多く、それだけを取り出すと一文の諺ほど迫力が無いことも多い。しかし意味内容に迫力がある物もある。例えば、「慣用句」の「新潮・岩波共通」の⑰「阿鼻無間に落つる」は誰でもちょっと想像するだけで怖い。それを思えば⑱「身の毛もよだつばかり」怖い。だからこそ刈萱道心は、大誓文の出家の誓いを破って阿鼻無間に落ちることを恐れて家族を頑なに拒み続ける。阿鼻無間はそれほどの迫力で恐ろしいのである。また、㉒「旅装束の跡ばかり」は旅装した形跡だけという視覚的表現によって、人が去った現場の喪失感がある。また、㉓「流涕焦がれて」泣き、㉔「落つる涙の隙よりも」涙ながらに話したり行動に移る。流れる涙が熱くて焦がれる程という誇張表現は強い悲しみを迫力一杯に表す成句だった。ただ乱用すれば迫力が擦り切れるのだが。

三・四・四. 全般的な考察

以上は「刈萱」に限った(表三)(表四)への考察であったが、それ以外の全般的なことを付け加えておきたい。項目(一)では(表二)を参考に「作品の場面と諺」、項目(二)(三)で、説経という語り物における諺・慣用句などの定型表現の機能について述べる。

(一)前述三・一の(表一)(表二)の後に「諺は場面に応じて必要なものを使用するから、作品ごとに場面が異なるに伴って諺の出現も異なるのではないか」と憶説を記したが、若干の例を示そう。

「刈萱」の「身捨つる藪は無けれども子捨つる藪は有る」は、弘法の生母が赤子(後の弘法)を泣く泣く捨てる場面であり、高野山の由来を語る「高野の巻」にふさわしい諺である。

「小栗」「信徳」の恋文の使いの場面で、女性が侍女に「百様知って一様知らずば争うことなかれ」、使いの男が「夫の心と内裏(／大仏)の柱は大きても太かれ」と諺を使う。また「小栗」「山椒」の一夜の宿を請う場面で「旅は心、世は情」「廻船(／大船)は浦がかり」の諺を使う。これらも場面特有な諺の適例で、こうした場面がない「刈

萱」には出現しないのである。

（二）語り手にとっては、即席で適当な定型表現を繰り出しながら急速に物語を形成していく助けになり、聞き手にとっては、①常套句による大まかな場面把握、②視覚性の喚起、③真理をつく表現への共感や再発見の喜び、④繰り返しによる高揚等の種々の作用が相まって、哀れな物語に没入していく助けになる。

（三）定型表現は、簡潔で効果的という利点があるが、擦切れて陳腐な常套句に堕することもある。たとえば、慣用句「玉の屋形」「身二つになる」等は、作られた当初は視覚的な実感を伴った洒落た表現だったろうが、無造作に使われることでそうした効果は消え去っている。

四．まとめ

説経「刈萱」の二種類の本文で諺・慣用句を収集した結果、次のようなことを解明できた。

①諺は二十七種、慣用句は八十六種が存在していた。その中で繰り返し出現するものもある。三種の注釈書には注として記載されていない例がかなりある。

②底本による有無と形態の違いがかなりある。

③「説経らしい語り口」の一面として迫力ある表現や印象深い言い回しの例がある。

④諺・慣用句などの定型表現は、語り手の即席構成を助け、聞き手の理解と感動を促進する。

定型表現については、辞書的収集とそれに基づく理論研究が進んできたが、今後は具体的文脈における機能の研究が提起されている。

本稿では「刈萱」一作品の二種のテキストから収集したデータベースを示したが、定型表現の個性的な生き生き

した運用についての具体的で理論的な考察は不十分であった。舞台としての高野山、主人公刈萱の道心聖という有り様との切り結びも出来なかった。今後の課題としたい。

注

(1)古態の五説経が何を指すかは諸説あり、本稿で取り上げた四作品は問題ないが、残る一つが確かでない。説経は野外の語り物芸能から劇場に進出して、浄瑠璃風の説経浄瑠璃に変質し独自性を失う。それ以前の古態の説経を見分ける特徴は、①冒頭の本地語り、②接続助詞「てに」、③六段でなく上中下、等が挙げられる。

(2)芸能史・文学史の研究業績については、信多純一(一九九九)は、芸能史・書誌・文学史・宗教性など総合的で貴重情報が多い。その他は「参考文献」も参照。

(3)説経「刈萱」と高野山の時宗聖の関係については、岩崎武夫(一九七三)の「第四章『かるかや』と聖の世界」に詳しく論じられている。

(4)諺・慣用句など定型表現に関する理論研究としては、土屋智行(二〇〇九)に、外国文献や宮地裕(一九八五)「慣用句の周辺―連語・ことわざ・複合語―」『日本語学』4(六二～七五頁)と批判論文を紹介して自らの分類を示している。参考文献も充実している。

(5)武田勝昭(一九九六)は、リード文において「言語学は、ことばの運用面へと視野を広げつつある。「ことわざ」研究においても、単なるテクスト分析に止まらず、ことわざをコンテクストの中にもどした言語運用の視点からの研究が、今、求められている」と強調し、六章でことわざの文脈付き収集の世界的うねりを述べている。また、土屋智行(二〇〇九)も末尾「今後の展望」で、慣用句とことわざの中間にある表現の分析が必要として具体例を上げてから、「定型表現の下位カテゴリー間の違いは、形式的意味的特徴

に限らず生起する文脈に大きな違いが現れる」として、文脈にわたる分析が必要となることを説いている。

参考文献

〈調査対象＝本文と諺注記について〉

『説経節』（一九七三、平凡社東洋文庫）

『説経集』（一九七七、新潮日本古典集成）

『古浄瑠璃・説経集』（一九九九、岩波新日本古典文学大系）

〈説経関係の著書論文〉

岩崎武夫（一九七三）『さんせう太夫考　中世の説経語り』（平凡社）

山本吉左右（一九八八）『くつわの音がざざめいて　語りの文芸考』（平凡社）

信多純一（一九九九）「近世初期の語り物」『古浄瑠璃　説経集』（新日本古典文学大系五五一～五八一頁）

〈言語研究の著書論文〉

宮地裕（一九八二）『慣用句の意味と用法』明治書院

宮地裕（一九八五）「慣用句の周辺―連語・ことわざ・複合語―」『日本語学』一月号　明治書院（六二～七五頁）

武田勝昭（一九九六）「「ことわざ学」の展望」『月刊言語』七月号　特集「ことわざ学のすすめ」大修館書店（二一～二七頁）

土屋智行（二〇〇九）「日本語定形表現の体系的分類に向けて：特に辞書記述に基づく慣用表現とことわざの分析を中心に」『言語科学論集』一五号　京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座（五五～七七頁）

〈柏原卓の関係論文〉

柏原卓(二〇〇四)「紀州関連の古説経にみる文体特徴」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』二四号(二九～四八頁)

次の二点は論文中で参照していないが、諺の具体に視野を広げ、諺の文脈付き収集の方法面で基礎となった。

柏原卓(二〇二〇)「日韓の文芸における諺使用」『韓国文化研究』別冊第三号　韓国文化学会(三三～四〇頁)
柏原卓(二〇二二)「パンソリ『春香伝』中の諺―その使用と変容―」『東アジア社会における諺と慣用句の研究　甲南大学総合研究所叢書一四五』甲南大学総合研究所(全六二頁。分担一九～三二頁)(もと、二〇二〇年七月トルコでリモート開催の中部東部ヨーロッパ韓国学会国際学術大会への韓国語による発表論文を、甲南大学総合研究所二〇一九～二〇年度研究チーム成果報告書＝研究所叢書一四五のために日本語訳したもの)